

世界文化遺産平遥古城と票号

張 貴 民

1. はじめに

古来、中国の都市建設は外敵の侵入に備え、都市周囲に堅剛な城牆（城壁）をめぐらせるのが基本であった。しかし、現在、西安など少数の都市を除けば、ほとんどの都市では、近代化に伴い交通の妨げとなるため、城壁が取り壊されてしまった。平遥古城は、黄土高原のごく普通の農業地域に位置しているため、その城壁は近代化の犠牲にならず奇跡的に残されている。かけがえのない町並みも明清時代のままである。

2700年の歴史を持つ平遥古城は、その城壁と町並みが高く評価され、1986年に中国政府から「国家歴史文化都市」と認定された。さらに1997年12月3日に平遥古城と周辺の大林寺・鎮国寺と一緒に世界文化遺産の指定を受けている。改革開放以前まで無名な地方小都市であった平遥は、一躍国内外の有名観光地として脚光を浴び、一年中観光客で賑わっている。主要産業が農業であったこの地域も、世界文化遺産平遥古城を守りながら観光業の道を歩みだした。ここでは、城壁都市平遥の歴史、都市景観の特徴および平遥の発展に密接に関係する票号について述べていく。

2. 平遥県の概要

山西省は中国中部、黄河中流、黄土高原の東部に位置している。平遥県はその山西省の中部、太原盆地の南端に位置し、面積は1,253km²、総人口は約49万人である。平遥県の県庁所在地は平遥古城である。

平遥県の南東部は山地、北西部は汾河低地、その間は丘陵地である。したがって、地形は南東から北西へと傾いている。南東部の山地は大岳山の支脈に属し、南西―北東方向に配列し、起伏が大きい。海拔は1,700m～1,900m、最高峰の孟山頭は1,962mである。昌源河、潤河、恵濟河などの県内の主要な河川は南東山地を源流としている。年間降水量が480mmの平遥県にとって、

これらの河川は貴重な水源であり、県北西部を貫流する黄河の支流である汾河とともに平遥県の農業地域を潤っている。一方、中部の丘陵地帯は起伏があり比較的厚い黄土の層に覆われ、その黄土層は、侵食によって大小無数の侵食地形ガリーができています。北西部の汾河低地は海拔が約750m、平坦で水が得やすく、土壌も肥沃であるため、古くからの穀倉地帯である。北西部は人口が多く、集落が発達している。

平遥から同蒲鉄道で北は省都の太原市、さらに大同市、北京市、東は河北省の省都石家荘市、南は陝西省の省都西安市など周辺大都市へとアクセスできる。また太原空港を利用すれば、中国国内の主要都市へのアクセスも便利である。現在、高速道路が建設され、平遥への利便性がさらに高まった。

3. 平遥古城の歴史

平遥は旧称平陶、帝堯の封地と言われている。春秋時代に晋国の属地、戦国時代に趙国の属地であった。秦の時代に平陶県が設置され、漢の時代に京陵県と中都県の2県が設置され、北魏の始光元年（424年）に県名が平陶県から平遥県に改められ、今日に至る。

平遥の城壁は初めて造られたのが紀元前827年～782年の周宣王時代とされている。『平遥県誌』によると、「西周の大將尹吉甫と嚴允がここに兵を駐在させた」との記録がある。明洪武3年（紀元1370年）になると、軍事防衛のため、西周時代の古い城壁（土牆）を石と煉瓦で覆い、現在のような堅剛な城壁になった。

平遥古城は、明代と清代の約500年間にわたり、延べ26回の修繕を重ねた。重なる修繕工事によって平遥城壁はいっそう堅固となり、壮観となった。城壁はまさしくこの町の繁栄のシンボルであった。

平遥古城には国宝が3ヶ所（城壁、大林寺と鎮国寺）、省レベルの重要文化財が6ヶ所（文廟の大成殿、慈相寺、市楼、清虚観、日昇昌票号旧址、文廟）、県レベル

の文化財が90ヶ所ほどある。文化財の多さとその保存状態の良さは県レベルの都市ではほかに類をみない。その中には北斎武平2年(571)年に建立された双林寺、唐代顕慶2年(657年)に建立された清虚観、北漢天会7年(963年)に建立された鎮国寺の万仏殿および文廟の大成殿が特筆すべきであろう。

4. 平遥古城の空間的特徴

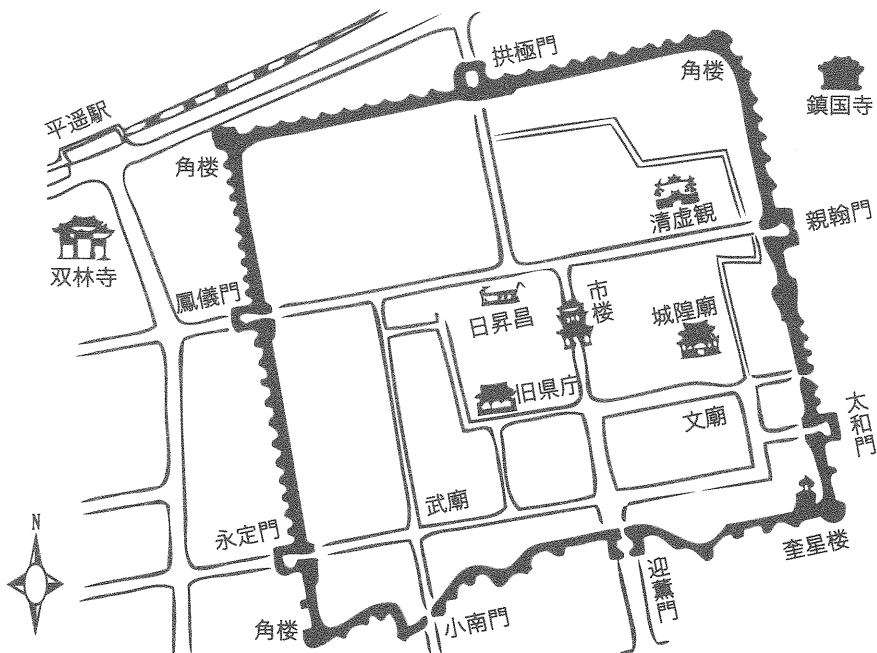
平遥古城を囲む城壁は正方形で、中軸線は北西—南東になっている。東・西と北の城壁は直線であるが、南の城壁は河川に沿って造られているため直線ではない。城壁は周囲が6,157.7mで、高さが場所によって異なるが6m~10mである。また、城壁の幅は上部で3m~5m、底辺部で9m~12mである。城壁の外側に巡らされている壕は、深さと幅ともに3.3mである。また、壕には各城門へ通じるつり橋が設けられていた。

平遥古城の町並みはまるで映画のセットのように連なっている。城壁には6ヶ所の城門が設けられている(第1図)。北に拱極門(通称北門)、南に迎薰門(南門)、西に鳳儀門(下西門)と永定門(上西門)、東に親翰門(上東門)と太和門(下東門)である。城門が古城の出入り口になっている。城門は二重構造の楼閣となっており、城門の手前に「甕城」と呼ばれる構造

物があり、城内に攻め入る外敵を甕城で足止め、城壁や箭楼(甕城に設置された櫓)から攻撃をしかけることができた。また、城壁の4つ隅角にそれぞれ角楼がある。城壁に3,000個の垛口があり、さらに72の観敵楼(約60m間隔)が設けられている。これらの建造物の数は孔子の弟子3,000人と賢人72人という数に合わせて造られたものとの言い伝えもある。

上空から見ると、平遥古城はまるで亀のように見えることから「亀城」と呼ばれている。拱極門(北門)付近は標高が最も低く、古城の雨水などはここから城外へ流れる。南北の城門と楼閣が亀の頭と尾、城壁の東西に対称的に配列する甕城は亀の足を、そして南門にある2つの井戸は亀の目を象徴している。また、レンガづくりの城壁と並んで、城外の北東部にある鎮国寺や城外西部にある双林寺は平遥の三大宝と言われている。

平遥古城には清朝末期の民居と寺院建築が多数あり、レンガで敷き詰めた道路も、城壁とともに平遥古城の景観を構成している。風水の思想に基づく厳格な住居の配置、美しく古朴な建築技法などは、いずれも清代の建築水準の高さと民族的特徴を反映している。統計によれば、平遥古城には3,797軒の四合院式の民家が残り、その内の約400ヶ所はほぼ当時のまま保存されている。



第1図 平遥古城の城壁と町並み

平遥古城の中心部に位置する市楼は平遥古城の代表的な建築物の1つである。南大街を跨いで高く聳える市楼は、平遥古城の繁栄と衰退を見つめてきた。3階建てで、高さが18.5mもある。市楼は古城東部にある文廟の大成殿や清虚観などの高層建築とともに、広く分布する灰色の屋根の一般民居と対照的である。古城に起伏する町並みの輪郭を一層美しくしている。市楼の1階は南大街を往来する通路になっている。市楼の南東に階段があり、そこから2階まで登ることができる。2階には菩薩像のほかに、三国志の英雄関羽を讃える綺麗な壁画がある。また、市楼から古城全体を一望できる。「縦目攬山秀於東南、挹清流於西北、仰視煙雲变幻、俯臨城市之繁華。」と清代詩人趙謙徳が詠う。

面積2.25平方キロの古城には、主要な街路が4本、それに次ぐ街路が8本、さらに72本の細い道が縦横に走っており、広大な八卦図になっている。建物の立ち並ぶ大通りや狭い路地により、古城が基盤目状に区切られている。南大街を中軸として、重要施設が対称的に配置されている。左（東部）に城隍、右（西部）に衙署、そして左（東部）に文廟、右（西部）に武廟、さらに左（東部）に道観、右（西部）に寺院といった施設配置は、封建礼制の「左文右武」の都市計画思想を強く反映したものである。都市規模の違いはあるものの、平遥古城の都市構造は北京古城のそれと共通している。

メインストリートの南大街をみると、街路に面した建物は2階建てで、1階部分は店舗として商業がみられるが、その背後は四合院という居住空間になっている。当時として「前街後宅」という明確な空間機能区分があった。現在、ここは明清商業貿易街と称して、多くの観光客で賑わっている。

市楼の南側に井戸があり、井戸水が金のように輝いていたことから、市楼は「金井楼」という別称もある。なお、市楼の創建年代は不詳だが、再建時の碑文によれば現在の建物は清代康熙27年（1688年）に再建されたものである。

平遥古城は街路・市楼・商店などの原型をとどめており、中国国内でも最も保存状態のよい明清時代の県城であり、中原地域における漢民族の典型的な古い県城である。そういう意味では、平遥古城は中国政治・経済・文化・軍事・建築・芸術など分野の研究にとって絶好な研究対象と言えよう。

5. 票号の発展と衰退

平遥は昔懐かしい城壁都市として有名であるが、ここはかつて中国最大の金融の中心地であった。一人当たりの耕地面積の少ないこの地方の人々は、古くから行商で生計を立てるものは少なくなかった。勤勉な山西商人（山西省の略称が晋ということから彼らのことを晋商という）は、行商先で見聞を広げ、新しい知識を得て、商売の技能を身につけて商売のネットワークを築き上げた。山西商人は従来にない独特な商売である票号の経営によって巨万の富を手に入れた。票号とは、為替を扱う金融機関、つまり銀行のことであった。山西商人は明代から清代にかけて、この小さな町を拠点として活躍し中国全国に名を馳せた。そのため、平遥古城は「小北京」と例えられるほど繁栄していた。

実は、平遥には最初に莫大な富をもたらしたのは票号の経営ではなく、万里の長城の建設に関係があった。明朝は北方少数民族の襲撃を防ぐために大規模な兵力を長城に沿って配備した。山西商人はそこへの物資の納入という大仕事を一手に引き受けた。見事に成し遂げたため、国の専売とされていた塩の販売権を獲得し、さらに巨利を手にした。こうして、山西商人は従来から取り引きしてきた生糸や穀物に加えて、塩の専売権も独占し、巨万の富を蓄えることができた。この蓄財は後に票号の経営に乗り出す要素の1つとなった。

平遥古城に大きく発展する時代が訪れた。豊かな財力にものをいわせて、山西商人は競うように、活動拠点の平遥に贅を尽くした豪邸を次々と建てた。住宅の様式は中庭を東西南北4つの棟で囲む伝統的な四合院であるが、富豪の邸宅にはその中庭がいくつも連なり、住宅はその主の財力・地位や名声の象徴であった。

一方、富を蓄えた山西商人は新たな商売に乗り出すことになった。それは票号であった。周知の通り、明朝以降、中国では銀は正式な通貨であった。蹄形の馬蹄銀が使われていた。しかし、大量の馬蹄銀を運ぶ途中で盗賊に襲われる危険もあったし、決済にも時間がかかった。

当時、西裕成顔料庄の北京支店を経営していた雷履泰氏は、地域間における馬蹄銀の流通量が大きくなったにもかかわらず、依然として現金の馬蹄銀を運ぶ手段しかないこと、輸送途中で盗賊に襲われたり決済にも時間がかかったりする問題点を見て、どこでも決済できるシステムがあるときっと儲かるに違いないと思っ

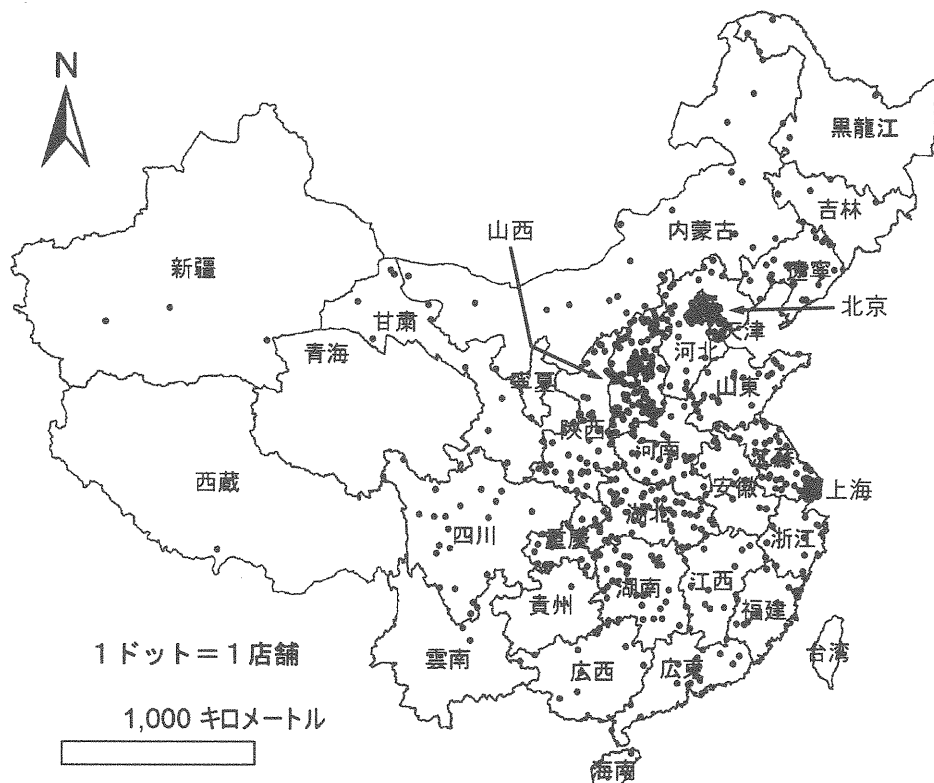
た。西裕成顔料庄のオーナーの李氏に票号設立の進言をした雷氏の意見が採用された。現金の馬蹄銀の輸送に代えて、為替を発行することで、どこでも決済できるシステム、つまり票号というシステムの誕生である。こうして中国最初の票号日昇昌は、李氏が経営していた「西裕成顔料庄」を改組して、清代道光4年(1824年)に平遥古城の西大街に開業したものである。日昇昌の本店は平遥に置いた。当初、主に個人向けの預金や貸金の業務を運営していた。金融に対する需要が大きくなったため、事業内容を徐々に金融業専門に切り替えて、中国初めての「票号」を作り上げた。

票号「日昇昌」が成立した後、その預金貸金業務は急速に発展し、客も官僚や地主から一般商人まで多岐に渡った。決済業務はまず本店(平遥西大街)と北京支店(北京崇文門外草廠十條南口)との間で試みたが、清代道光30年(1850年)になると、「日昇昌」は北京・蘇州・揚州・重慶・三原・開封・広州・漢口・常德・南昌・西安・長沙・成都・清江浦・済南・張家口・天津・河口など18の都市に支店をもつようになった。さらに光緒12年(1886年)に沙市・上海・杭州・湘潭・桂林の5都市にも支店ができた。票号日昇昌は「京都

日昇昌匯通天下」といわれるまで大きく発展した。

日昇昌の成功を目の当たりにした山西商人は競うように票号への投資を開始した。清朝道光年間(1821~1850)に、日昇昌をはじめ、蔚泰厚、蔚豊厚、天成亨、蔚盛長、新泰厚、日新中、広泰興、合盛元、志成信など10社が相次いで創業された。咸豊年間の太平天国の影響も受けたが、その後も増加し続けた。統計によれば、山西省の票号の数は次のように推移していた。1861年(咸豊10年)に14社、1862年(咸豊12年)~1874年(同治13年)に26家、1875年~1882年に28社、1879年(光緒5年)に29社、1883年(光緒9年)に30社、1893年(光緒19年)に28社であった。

票号の増加に伴い、各票号は全国各地に支店を開設するようになった。山西商人が中国全国に商売のネットワークを持っていたことは票号支店網の拡大を容易にした。第2図は清代にける山西省の票号の分布図である。地図は現在の行政区を示したが、地名や地域の範囲は当時のそれと異なるところがあるので注意されたい。当時、山西省は全国各地に124の都市に本店と支店を合わせて647店舗(外蒙の2都市2店舗が含まれている)であった。



第2図 票号の店舗網の分布図

第1表 山西省における票号の三大グループ

票号	所属票幫	出資者	経営者	資本金(両)	以前の商売	創立年代
日昇昌	平遥	李正華	雷履泰	320,000	顔料	道光初年
蔚泰厚	平遥	侯癸	毛鴻翹	240,000	—	道光初年
蔚豊厚	平遥	侯氏	範凝静	200,000	—	道光初年
天成亨	平遥	侯氏	侯王賓	200,000	布類	道光初年
蔚盛長	平遥	侯氏	李夢庚	160,000	綢緞	道光初年
新泰厚	平遥	侯氏	侯王敬	160,000	綢緞	道光初年
蔚長厚	平遥	—	範光晋	150,000	茶葉	道光初年
協同慶	平遥	米・王氏	劉清和	120,000	—	光緒初年
協和信	平遥	王氏	李清芳	100,000	—	光緒初年
匯源永	平遥	渠氏	殷啓祥	140,000	—	光緒初年
百川通	平遥	渠氏	龐凝山	160,000	—	光緒初年
宝豊隆	平遥	—	喬世傑	200,000	—	光緒初年
大徳通	祁県	喬氏	—	240,000	茶葉	道光初年
大徳恒	祁県	喬氏	—	240,000	—	道光初年
三晋源	祁県	渠氏	—	300,000	—	道光初年
存義公	祁県	渠氏	—	200,000	布類	道光初年
合盛元	祁県	郭氏	—	200,000	—	道光初年
中興和	祁県	戴氏	—	160,000	—	道光初年
大盛川	祁県	張氏	—	200,000	—	道光初年
長盛川	祁県	渠氏	—	200,000	—	光緒初年
元豊玖	祁県	孫氏	王封晋	140,000	—	光緒初年
志成信	太谷	員・孔氏	—	260,000	—	道光初年
協成乾	太谷	員・孔氏	—	240,000	—	道光初年
大徳玉	太谷	常氏	—	200,000	—	道光初年
錦生潤	太谷	常氏	—	200,000	—	光緒初年
世義信	太谷	楊氏	—	300,000	—	光緒初年
大徳川	太谷	常氏	—	200,000	—	光緒初年

注：道光時代は1821年から1850年まで、光緒時代は1875年から1908年まで。

張正明(2001)：『晋商興衰史』山西古籍出版社により作成。

第2図によれば、山西省における票号の店舗数が最も多く124店舗であった。山西省以外の地域として、20店舗以上を持つ地域は、湖北(59店舗)、江蘇(37店舗)、陝西(37店舗)、河南(36店舗)、湖南(35店舗)、北京(31店舗)、上海(31店舗)、天津(30店舗)、遼寧(29店舗)、四川(23店舗)、内モンゴ(22店舗)、河北(21店舗)、重慶(20店舗)などであった。第2図からも分かるように、山西商人は平遥古城を活動の拠点として、票号の支店網を中国全土に広げて、中国の経済界を牛耳る一大勢力として成長していった。さらに、票号の支店網は中国国内に留まらず、その範囲は日本(5都市5店舗)、朝鮮半島(3都市3店舗)、インド(1都市2店舗)など外国までに拡大していた。清朝の山西商人は中国に留まらず、外国までにその名を知られる

ようになった。

山西省における票号の支店網が空間的に拡大する中、票号の本店の所在地によって、票幫と呼ばれるグループが形成していた(第1表)。本店が平遥県にある票号のことを「平幫」(平遥グループ)、本店が祁県にある票号のことを「祁幫」(祁県グループ)、そして本店が太谷県にある票号のことを「太幫」(太谷グループ)とそれぞれ称している。以上3つのグループの中では、平遥グループの歴史が最も古く、票号創始の先駆けであった。

山西商人は、その持ち前の商才を発揮し手広く商売を開拓していた。例えば、鏢局と呼ばれる中国初の民間警備会社を設立したのも山西商人であった。しかし、経済活動の中で、票号が最も重要なウエートを占めて

いた。公金の輸送にも為替の使用がよいと認められると、信用度が高く票号の経営で培った経営能力を持つ山西商人は、国家の資金までを取り扱うようになった。この平遥の地で、独特な暗号システムを考案した山西商人は、300以上の暗号を使い分け、莫大な資金を自由自在に動かして、19世紀後半には中国の為替業務のほとんどを独占していた。

しかし、19世紀半ば、ヨーロッパ列強による侵略は、中国に更なる苦難を与えた。商号の経営にも大きな打撃を受けた。しかし、皮肉なことに、アヘン戦争以降、相次ぐ敗戦により巨額の賠償金の送金を一手に請け負ったのが山西商人であった。国難によって財を成した山西商人は、1912年に清王朝の滅亡に伴って後ろ盾を失い、近代銀行の発達や国際経済による中国への進出もあり、一気に没落した。

6. おわりに

以上、世界文化遺産平遥の歴史、都市景観および票号と山西商人（晋商）について述べてきた。特に山西商人による票号の支店網の全国進出については簡単に触れただけで、これらの詳細については今後の研究課題としたい。

平遥県は1978年の改革開放政策が実施されるまでは農業が主要産業であった。しかし、平遥古城が世界文化遺産に認定されたことは、山西商人の末裔にとってその商才を発揮する新しいチャンスの到来であった。城壁の外側でのホテル建設、古い民家を改造した旅館の開業、かつての富豪の庭がレストランへと変貌するなど、観光客を迎える準備が急ピッチに進められた。平遥県政府の資料によると、旧市街地を中心に世界文

化遺産の平遥城壁・町並み・晋商文化・民族文化などの観光を促進する一方、郊外の農村地域まで農村観光・農業体験・農村民俗などの観光資源を発掘し、全面的に観光業を進めている。2004年、平遥県はGDPに占める観光業の割合が約49%に達した。しかし、官民の過熱化する観光開発に対する疑問の声も聞かれる。かつての山西商人が全国各地へ行商して平遥の町と晋商文化を築き上げてきたが、その末裔は平遥古城と晋商文化を商売の資本としてそれを遅く利用している。時代とともに山西商人も商売の在り方も変わるべきだろうが、かけがえのない平遥古城と貴重な晋商文化を失わずに、その独特な都市空間とそこから形成された晋商文化を持続的に保存・利用していくための課題が多いように思われる。

参考文献

- 侯 文正(2006)：晋中商幫興衰史略、文史月刊、1期～9期。
- 籍 振芳(2007)：『山西省精品旅遊地図冊』山東省地図出版社、297p。
- 山西省地図集編纂委員会(2006)：『山西省旅遊地図集』山東省地図出版社、pp130-135。
- 張 正明(2001)：『晋商興衰史—称雄商界500年—』山西古籍出版社、331p。
- 李 修仁(1987)：『山西年鑑』山西人民出版社、pp562-563。
- 劉 家明・陶 偉・郭 英之(2000)：伝統民居旅遊開発研究—平遥古城為案例—、地理研究、19-3、pp264-270。